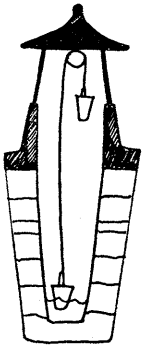
一枚の写真

——メタ・テキストとしての——

本田和子



満開の桜の下に、子どもたちが並ぶ。入園の日の緊張が、彼らの表情から笑いを奪い、その幼い肢体を、硬くこわばらせる。なかには、唇をへの字に結んで泣き出す寸前の顔もまじる。

シャッターが切られた。その瞬間、待っていたように、まばたきする子どもの顔、顔。それによく見ると、中央の園長先生まで、お目を半分、閉じかけていらしたりする。

こんな一枚の写真が、子どもたちのアルバムに貼られ、幼稚園生活のはじまりの日を刻印して、その出発を記念する。彼らは、成長の折ふしに、その古ぼけた写真を手に取り、小さな二次元空間から立ち昇ってくる、「ほんのりした幼い日」の感触に浸るだろう。そして、何がなし、優しく、満ち足りた思いで、アルバムを閉じるに相違ない。

私どもにとって、入園式や卒園式の写真は、一般には、幼い日をよみがえらせる手がかりとして、慎ましく、片隅に位置を占めているのだ。

◈　◈　◈

ところで、私は、いま、これらの写真に、個人的懐旧の資料以上の意味を、になわせようとしている。何故なら、こうした記念碑的な写真は、個人の生育史の一駒を物語るだけでなく、それ以

上に、様々なメッセージを内蔵していると思うからだ。とりわけ、写真が未だ日常的に普及せず、「ハレの日」のものとして位置づいた古い時代のそれらの中には、子どもらの生の様態と、時代の横顔が、ぎっしりと詰め込まれていて、尽きぬ興味をそゝられる。

例えば、子どもたちは、どんな装いで、どんな配列で、どこに並んでいるのだろうか。羽織・袴で？　丸坊主で？　立って？　座って？　背景は、玄関か、それとも、園庭の桜の木か？

それら映像の背後からは、子どもらの想いと、時代の想いが、透けて見えてこないだろうか。このとき、一枚の写真は、彼らについて考えるメタフォリカルなテキストとして、私どもに、「読み解き」を要求し始めるのである。

「写真を読む」という言い方は、或いは、奇異に聞こえるかも知れない。然し、私どもは、映像を、単に網膜に与えられた像として感受しているのではなく、私どもなりの意味において、解釈しつゝ把握している。私どもが周囲の世界を見て、それについて知るということは、それをテキスト化し、不断の読み解きにおいて、それらと出会っていると言うことなのだ。

このような視座から、いまや、あらゆるものが、テキストとして把握され、解読の対象とされ始めた。服飾が読まれ、建築が読まれ、都市が読まれる。写真や絵画が、「読み解きの対象」とされることなど、当り前とすら言えるかも知れない。

◈　◈　◈

こゝに、一枚の写真がある。「東京女子師範学校附属幼稚園職員及園児」と記入され、明治十五年の日付けが入っている。（写真(1)）[*1]

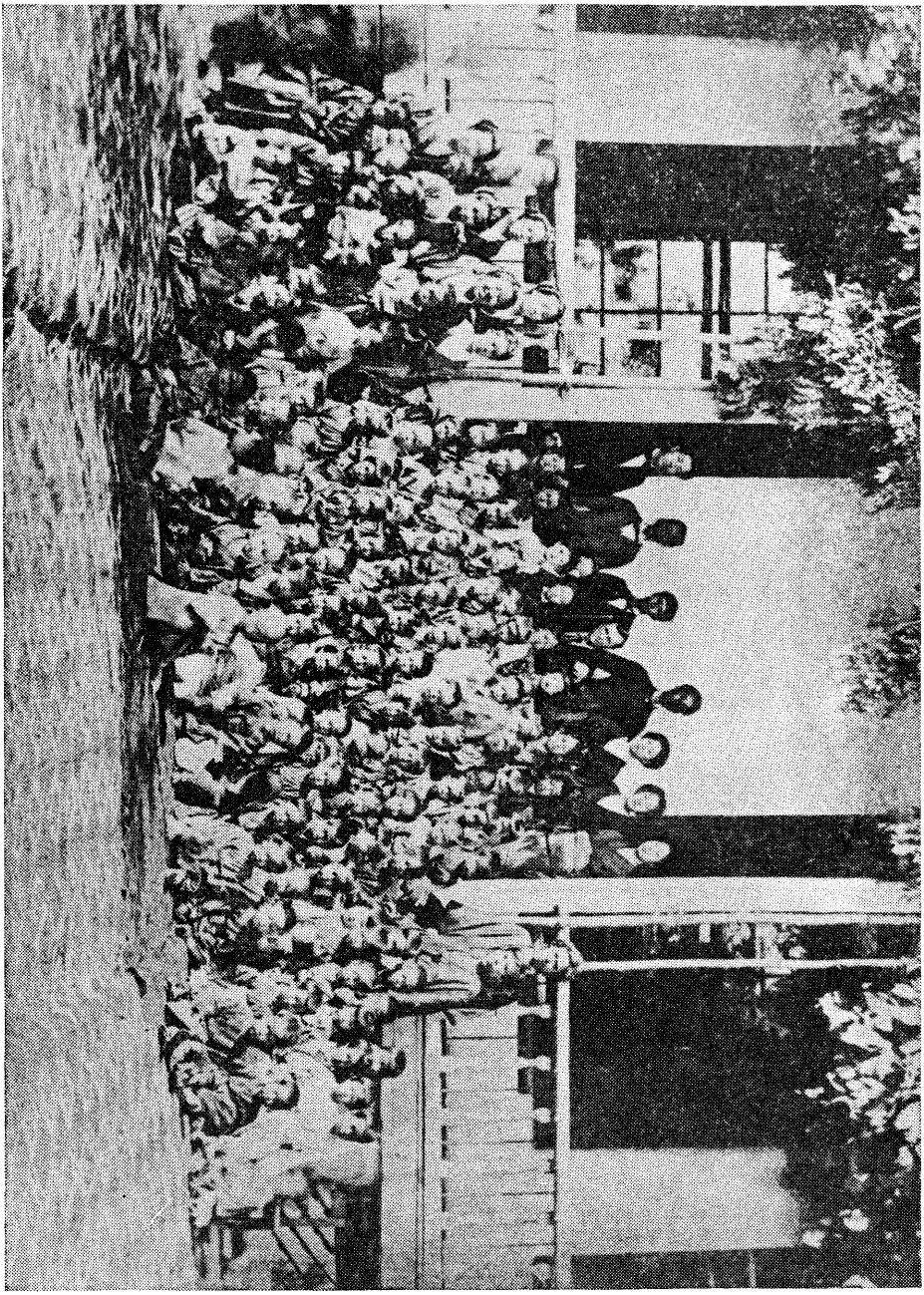
全園児が一場に会したことは、何らかの意味で公式の機会なのであろうが、確かめるすべはない。手すりに匍わせた藤の枝に、花房は見えず、葉だけ見事に繁っている。恐らく、卒業式の季節ではなく、入園式か、或いは、秋の開園記念日でもあろうか。女教師たちの着物は、羽織なしで、素袷のように見える。

ところで、この一枚の写真は、私どもに、実に様々なことを語りかけてくる。

(1)　近代化のモニュメントとしての園舎

例えば、彼らは、庭に面したベランダの階段に並び、前列の子どもたちは、地面に敷かれた絨毯の上に、正座したり、えんこしたりしている。

記念撮影にこの場所が選ばれたのは、こゝが、最もよく、附属



幼稚園を象徴する場所であったからだろう。明治九年に竣工したこの園舎は、二五〇坪に及ぶ平屋の洋風建築で、一段と「珍しく人々の目にうつった」[*2]と言う。

明治文明開化とは、大衆にとって先ず何よりも、「視覚世界の変貌」であったと言われている。[*3]それは、支配層によって意識的に選択された近代化の指標である。政府は、建築の視覚的メディアとしての性格を鋭く直覚し、兵営と官立学校に、いち早くそれを適用した。附属幼稚園も、その典型例の一つなのだ。

「鹿鳴館」に先立つ五年も前に、こんな洋風建築が用意されたのは、単なる幼児教育への理解や情熱だけではない。それは、こうして、近代教育を積極的に推進しつゝある「国家」なるものを、暗黙裡に伝達する視覚的メディアだったのである。

床が高く、ベランダ風の手すりについた廊下が園舎を特色づける。このベランダは、後の「鹿鳴館」にも設けられるのだが、幕末以来親しまれてきた、植民地風洋館形式の名残りである。ゴシック、バロック、或いはコロニアルスタイルなど、様式の如何を問わず洋風建築に附設されたのは、恐らく、象徴的な意味をになったからであろう。それゆえに、幼稚園の記念写真も、こゝで撮影されねばならなかったのだ。

(2) お抱え外人教師たち

後列中央に、一人の外国人が座っている。「音楽取調所」に招聘され、洋楽の指導に当ったH・メーソンではないかと思われるが、定かではない。氏の写真は、晩年のもののゆえか、この写真と似通ってはいるが、ピタリとは重ならない。

当時、本校で教鞭を取っていた武村耕靄の日記にも、「明治十五年一月三十日、メイソン唱歌の発表あり」と記されているが、たゞ、これと前後して、サンジョバンニなど、他の外人教師の動向も語られているので、外人教師との交流が頻繁だったことが浮かび上ってくる。従って、写真の外人が誰かということにもまして、当時の教育が、お抱え外人教師たちに極めて多く依存した、その証を見るべきであろう。

耕靄日記は、明治十二年の米国大統領グラント夫妻の来校をはじめとして、多くの外人貴賓の訪問を伝えている。この時代に、附属幼稚園は、国外へ向けられた「日本の顔」だったのである。

(3) 山の手に残る鄙の面影

子どもたちは、袂の長短、袴の有無のちがいこそあれ、ほゞ全員が和服。女教師も、教生と見える若い女性たちも、一様に、胸

をゆるく合わせて、ゆったりと着慣れた和服姿を見せる。服装界に、「視覚の近代」は、未だ訪れていない。

因みに、女子師範生が鹿鳴館風の洋服を着用し、正課の授業にダンスが加えられるのは、明治十八年である。子どもの洋服が、新聞や雑誌を賑わすのは、二十年以降のことである。

周知のとおり、当時の附属幼稚園児は、上流階級の子女が多い。にもかゝわらず、この写真に見られる彼らの服装は、地味で鄙びている。袂が比較的長いのは、それが日常着だったからで、筒袖の流行は、日清戦争の後と言う。[*4] 要するに、彼らは幕藩時代の衣生活の名残りで、慎ましく、地方武士の子弟風に身を装うていたのだろう。

それにしても、子どもたちの動作や表情の何と幼いことか。広いおでこの下にちんまりとくっついた目鼻は、まるで赤ん坊のようだし、ちょこんと重ねた両掌や、袂を前に合わせた座りようは、よちよち歩きの嬰児のそれだ。

そして、その表情の何と鄙びていることだろう。都会の子を特色づける神経の鋭さ、早熟な利発さは、どこにも現われていない。いまの日本なら、草深い山村ででもなければ、容易に見出せない表情なのだ。

当時の山の手は、旧幕時代の武家屋敷跡に桑や茶が植えられ、夜が更けると漆黒の闇に塗りこめられたと言う。神田川が清流で、「お茶の水橋」もかゝっていない時代である。湯島の附属幼稚園まで、子どもたちは、水道橋を廻って通った。そんな中で、子どもたちは、ゆっくりと成長したのであろう。

体を動かしたり、後を向いている子どもが目立つ。恐らくは、シャッター時間のせいであろうか。乾板写真は、一八七一年に開発されている。[*5] 従って当時は、湿板法から乾板法へ移行期であった。後者でも、1/6秒というシャッター時間は、子どもらにとって、長い緊張の時間だったに相違ない。

写真(2)は、比較対照の資料として揚げた。附属幼稚園の大正二年の卒業式の写真である、髪形、服装にもまして、目に著しいのは、彼らの表情の変化ではないか。三十年という歳月は、東京の子どもたちを、かく変貌させたのである。

*1　この写真は、「日本幼稚園史」(倉橋・新庄)にも掲載されている。

*2　右「日本幼稚園史」より引用

*3　「視覚の近代」(多木浩二、明治大正図誌2)

*4　「近代日本服装史」(昭和女子大学編)

*5　「日本写真発達史」(伊藤逸平)

◈編集部より

本年八十巻の二月号と三月号において、福西基、千羽喜代子の両氏に、定員問題の御執筆を頂きました。山下俊郎先生には、それらの雑誌が出る前に、原稿を依頼しております。どうか御諒解下さい。